

弱法師



栗津松彩子
明治45年生

●「老いを意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきつかけがありましたか？

私は今年米寿を迎えた。元来自分を老と思わぬようにしている。俳句の現役として、句作、句会、選句など執筆多忙で、老いを意識しては仕事にならない。芦屋ホトトギス句会の、百三十名の選句を私一人で披露する。

老いの句を作った事もない。

「ホトトギス」の昭和六十二年に「鴉と老人」という写生文を書いた。東京駅前のベンチに腰掛けている時、前に一羽の羽拔鴉が下りた。舗道際の鈴懸の青葉の落ちていく所に鴉はじっとしている。私を意識しているかのよう

に十分ほどそのままだった。ふと老いを意識していた。嵯峨祇王寺の智照尼は、故あって自ら小指を切断して仏門に入った尼である。俳句を作られ、いつの頃からか私と親交があった。平成五年十月、智照尼から私に会いたいという手紙が来た。訪ねると私のために嵯峨でとれたという松茸が用意されていた。火の無い掘炬燵に足を入れて長話をした。帰りしなに手をさしのべられたので握手をした。智照尼は「あなたの手はあたたかいです

ね」と言った。智照尼九十七歳、私七十六歳の老いの握手であった。一年後に他界された。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一三句程度挙げ、簡単に自解してください。

私は杖を突かなくては歩けない。足腰が痛み、腰もし曲った。

突く杖を汗が握つてをりにけり

杖突いて吾も弱法師秋風裡

大和の唐招提寺へ名月を見に行った。六時開門まで入ってくれないので、付近の田圃の畦に腰かけて待った。

月を待つ畦に坐し吾も弱法師

まさしく老乞食法師の姿である。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

虚子先生に老いの句はあまたある。

自らの老好もしや菊に立つ 高浜虚子

大正十五年、五十二歳の作である。この歳ですでに老いを意識されていたのであろうか。

舌少し曲り目出度し老の春 高浜虚子

老いよりも自由を感じた



下村梅子
明治45年生

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきつかけがありましたか？

昭和四十年頃か、三歳年上の古文の師から頂いた年賀状に、これから老いてゆくということの淋しさをよんだ歌が書かれてあった。この年賀状を読んで「老いゆくをさぶしむ歌の賀状かな」という句ができた。やがて自分もこのような感じを持つことであろうと思いつつも、それはそれとしてまだ「老い」を自覚していたわけではなかったようである。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一三句程度挙げ、簡単に自解してください。

余生とはいひたくはなし初鏡

余生とは、年をとり職を退いてから送る状態のこと、残された人生をいう。この作句の時点では、子供らもすでに独立しており、健康も別に異常な点はなく、あえて「老い」を意識することもなかったように思う。かえってわが生涯で一番自由を感じていたのではなかったろうか。「老い」ということにこだわっていなかったように

思う。

この雛とわれといづれが老いたるや

あるお宅のお雛様を拝見した。新しい雛段とは別に、古い雛が飾られてあった。立派なものであったが、やはり歳月の流れは、まぎれもなくこの雛の上にも見えた。この句はその時の心情を詠ったものである。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

女人の香亦めでたしや老の春 飯田蛇笏

天衣無縫ともいふべき風格、「老の春」の句では別格。

老妓とも云はるはずよ懷炉負ひ 下田実花

新橋の名妓であった実花さんの、あてやかなイメージのかげに、ちらりと見せた「老の影」である。

我よりも老行く妻や置炬燵 佐藤紅緑

明治の男性の、妻への愛情のほどが、ほのかに浮かび出ていると思う。

心は老いず



桂 信子
大正3年生

●「老いを意識なさつたことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？ 髪の毛が一筋の白髪がまじっていたのを人から指摘された時愕然とした。昭和三十三年冬。私四十三歳。」

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

一本の白髪おそろし冬の鴉

これは始めに書いたように一筋の白髪を人に見つけられ、はっとした時に出来た句。従つてその時の場所、会話などいまだに鮮明である。なお指摘した人は若白髪とも言える白髪の主。私の白髪を見つけてさぞ嬉しかったであろうと思う。『晩春』所載。

舟人に手を取られ乗る磯遊び

舟遊びをするとき、今までなら独りでさつさと舟に乗ったのに、やはり揺れる舟はこわいといった気持が先に立つ。つい舟人に助けられて舟に乗った時、自分ながら年をとったなあという感じがした。七十五歳。『樹影』。

初鏡のなかの媼やわれなりし

今年の『俳句』一月号の作。初鏡のなかの自分は今ま

でとすっかり違い白髪の媼に変貌している。いったいこれは誰なのだろうといふかるまでもなく、まさに自分の姿なのである。この外に「髪白き媼となりぬお元日」へ年を祝ぐくれるの衣に白髪」といったような句が同時に出来た。しかし髪がいくら白くならうとも心は今まで通り、否今までより一層若くなったような感じがしている。今年になって知人、友人の方が次々と亡くなるが、たぶん私も間もなくその中に入るであろうと思うが、しかし生命の尽きるまで、私の心は若く瑞々しくありたい。この年になって正に居直ったかんじ。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

此秋は何で年よる雲に鳥

芭蕉の句のなかでも特に好きな句。時々口誦さむ。

年の豆かたし齒よりぞ老いたりな 岡本圭岳

圭岳氏が句会で詠まれた句。齒や目の衰えは淋しい。

おのづから老いて足らへり福寿草 日野草城

五十代で亡くなられた草城先生には老いの句が少ない。老猫の句は散見されるが――『銀』所収。

気にしつゝ気にしない

●「老い」を意識なさつたことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？

七十歳も終る頃、ふと気付いたら、まわりの人たちが自分を老人として扱っているのに驚いたことがあり、それから、ことに会合などで、自分の歳を気にするようになった。自分より年寄りはいないか、といった気持が働くようになった。加えて七十九歳から八十歳にかけて、ひどく忙しかったことも、自分の年齢を気にする一因になっている。しかし日常の大半はそれを忘れていた。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

春落日しかし日暮れを急がない

長生きの麗のなかの眼玉かな

ともに老年意識にとらわれまいとして、〈気〉を張っている句。そのなかでも、「春落日」のほうはゆっくりとした〈気〉の張りかたで、その分感傷の翳を感じる向きもあろうか。「長生き」のほうは、きつく〈気〉を張っていて、年齢にこだわらず、自分をふくめて、なんでも見届けてやろう、これがやれるかぎり、へわれ若し



金子兜太
大正8年生

と自認してゆける、と思っている次第。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

花の陰寝まじ未来が恐しき

一茶

うっかり寝て、眠ってしまったら、そのまま死んでしまふかもしれない。それが恐ろしいから寝ない。あんなに美しい桜の花の木かげでも寝ない。――この率直な気持が嬉しい。そして、老年を意識しつゝそれを拒絶している物言いと思う。この句に前書がある。「耕ずして喰ひ、織ずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也」――一茶にはこれまでも同じような書き付けはあるが、いまあらためて思う、ということである。わたしも来し方の自分の行状に〈悔い〉を覚えることがしばしばある。やはり老年意識ということなのだろうか。晩年の一茶にいま一つ、妙に気持に残る句がある。

春の日や雨見て居てもくらさる、

一茶

一茶の句以外に記憶に残る句がない。男性八掛け説（暦年齢の八掛けが肉体年齢ということ）を信じていて、老いを無視しようとしているためだろう。

老い、ふもふも



飯島晴子
大正10年生

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきっかけがありましたか？

「老い」は常時意識させられている。しかし何歳頃からとか、その契機をはっきり言うことはできない。いつの程にか老いていた。「老い」は個人個人でみな異なる様相を呈すのではないかと思う。私の場合は修理不能な肉体的破損と付き合っているという感覚である。七十歳の時、頭の手術をしたので、それが表面の契機と言えるかもしれない。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一三句程度挙げ、簡単に自解してください。

螢の夜老い放題に老いんとす

掲句が出来たとき、本当に老いたならこうは言えないだろうな、と思った記憶がある。老い放題に老いることなど実現できないことの予感があった。そして「老い」の非常に近いことを感じた。六十六歳の作。

大雪にぼつかりと吾れ八十歳

今年の一月で数え年の八十歳になったときのイメー
ジ。私の住む横浜はこの冬一度も雪を見なかったが、ラ

ジオでどこかの地方に大雪警報が出ていた。ふんわりと広い雪原に私の八十歳がぼつかりと嘘のように在る。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以下）。

芽え返るとは取り落すものの音 石田勝彦
これは「老い」の句ではないのかもしれないが、私は自分の体験からこの句のうしろに「老い」を見てしまう。こんなはずではないと思いつながら、手や体がものを取り落してしまふのである。私はそのたびに「老い」を思い知るので、掲句にも「老い」を読みとるのが自然のようには思えるのである。

スペイン風邪以後の歳月風邪引かず 佐藤一喜
今年で八十九歳になる全く無名の人の作である。スペイン風邪は大正七年、スペインから世界中に大流行したインフルエンザで、国語辞典にも記載がある。佐藤氏は地方の小さい町に生まれて一生そこを動かず、定年まで都会の会社へ通勤するかたわら農業に従事。今も車椅子に松葉杖を積んで田の見廻りをするという。剛直な生きざまが句に現われている。

老いの句に自由さが得られるか



深見けん二
大正11年生

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきっかけがありましたか？

若い時から、胃腸が弱かったが、六十代から回復したためか、七十歳を過ぎても、若い時と比べ、体力の劣えを余り自覚しなかった。又私の俳句は境涯詠よりも、対象と心をつなげてゆく花鳥諷詠の写生に徹して来たため、老いを直接詠むことはなかった。その私が、老いを意識したのは、昨年、上野章子、藤松遊子、清崎敏郎ら長年親交のあった方々が次々に亡くなり、又、自分の喜寿の誕生日（三月五日）頃に引きこんだ風邪が仲々治らず、日常の仕事に支障が重なってからである。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一三句程度挙げ、簡単に自解してください。

花を見る少し老いたる心もて

昨年四月十五日、上野公園に一人で出掛け、東照宮の五重の塔あたりの残花を見た時の句である。それ以前、三月の「花鳥来」の吟行会で、風邪のため吟行せず、〈老を知り老を忘れて春の風〉を作り出席した。

その後老いの意識は増しているが、それとうまくつき合い、素直に、今迄より少しでも自由に写生が出来れば

幸せだと（老の字を入れなくても）考えている。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以上）。

自らの老好もしや菊に立つ 高浜虚子
大正十五年虚子師五十二歳の句。当時としては五十歳でも老いはおかしくない時代であるが、大正九年脳溢血で倒れたことも影響していたかも知れない。しかし以来還暦まで禁酒し、晩年は規則正しい生活をし、老いを早くから受け入れつつ〈椿艶これに對して老ひとり〉（昭和二十三年七十四歳）など多くの老いの句を残している。

蟻齧るただ老醜の憎しみに 山口青邨
昭和三十七年青邨師七十歳の句。自解は「いわれがな」の何にかされた時の老人のひがみ。前年へ権の花きびしくはふ古稀忘却」と詠み、老いに抵抗する気持が強い。七十四歳から四年間の句集を『不老』と題し、作品だけは老衰させたくないと願う心持を入れている。青邨が老いを自由に詠んだのは、句集『日は水し』（八十六歳―九十六歳）で、「ぢっばっ」と夫人を共に詠んだ句が多い。

老いに抗う老い

●「老いを意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきつかけがありましたか？」

老いを意識しないと言えは嘘になる。週二回、脑梗塞の再発予防とリハビリのため病院に行っている。もう六年も続いている。発病は七十歳の時か。今も左半身が脱力と痺れる。そのため、面倒なことが嫌になり、正しく老人性頑固病になっている。僕は「老」という言葉を好まないが、老人特有のヒネクレの証左かもしれない。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

驚くにあたらずに古稀や山眠る (95年)

生者必滅の教えがあるが、死へ向って人は歩いている。どのあたりに彼岸があるか解らないが、山は深ぶかと眠っている。自他を結ぶ感動は全くないのに、この句が生まれた。一切、緘黙甘受の山の姿に惹かれたようだ。

解凍のわが首に火や巴里祭 (99年)

何かにつけて死を意識する。蜘蛛膜下出血(昭和52年)と首から上の戦いを越えて、息絶えた冷蔵庫の中のわが首と会う(茶毘にふすとき首は起ち上がる)。全く血

の気がなくなった氷漬の顔だが、老人の顔ではない。巴里祭にひっそり、もう一つの首と会っている。

右手右眼が利き絶海の松の花 (97年)

句集『絶海』の祝賀会の時、思い切ってパフォーマンスをやった。舞台の上で倒れるのではないかとみんなハラハラした。絶海と言えは孤島を想像すると、伊藤白潮氏だか、倉橋羊村氏だかと言ったが、この手と眼がある限り、残存の時間をしっかり受止めたい。

●他の力だの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください(二句以上)。

風にあらがひ来たる薄涙 能村登四郎
こがらしは木を枯らす風だからよい身にしむ。長身瘦軀の男の色気を持つ能村先生の後姿に老いの美趣がある。少年期・壮年期を終えた「薄涙」はいかなる味がするものか。句がとめどなくできるのは何よりである。

われもまだ毒ふくみをり翁草 森 澄雄
白地の和服でくつろぐ昔の森先生を思い出すと「老」という字がいやおうなく被さってくる。近頃の句は老艶の境を見せやすい。「毒」と「翁草」に虚実と燦爛がある。



磯貝碧蹄館
大正13年生

老人は

●「老いを意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきつかけがありましたか？」

あります。私は戦中育ちの食いしん坊で(グルメではない)何でも美味しく、よく頂きます。四十歳になったばかりの頃でした。当時大御馳走であった豚カツの大きいのをペロリと平らげ、ビールなど飲み、ご機嫌で寝んだ翌朝、ふつと胃のあたりが重い感じがしました。それまで胃の存在に気づかなかった、それほど丈夫な消化器を持っていたのです。私にも胃があつたんだ、そういうえばもう四十歳、年をとったのだから気を付けなければ、と思ったのが忘れられません。詩的でないお話で、申し訳ないことであります。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

自分の「老い」を詠んだ句はないのです。九十五歳で亡くなった母と長い間同居していて、その老いを見て暮らして来ましたが、老いといえはいつも母の老いでした。これから自分の老いをゆつくり詠みたいと思っています。老い母のそこで途切れる手毬唄

老い母に早春の野は遙かなり

伊子の松山に幼時を過ごした母つる女が口ずさんでいた手毬唄は「ムカイノヤマニ サールガサンビキトマッテ」に始まり進んでいつの間にか途切れる、虚子先生と声を合わせて唄っていたこともありましたが。

二句目。俳句を作るのが好き、吟行が大好きだった母、今頃、箱根はいいでしょうね、と小さくなった背中を見せて春炬燵に埋まっていた日。

●他の力だの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください(二句以上)。

老人は老人を見る落葉降る 今井つる女
井の頭公園へ一人で行ってベンチに座っていたら、通る年寄りがみんな見ていくのよ。若い人はだれも見ない。犬も知らん顔。

そう言って、どうかしらとこの句を見せました。淋しいとも、静かだとも言わずに、淡々と老いを写生して余韻を残しているところに、深い印象を受けました。

この句、いいじゃない、と言った時の嬉しそうな顔を今も覚えています。



今井千鶴子
昭和3年生

これから何に気付くのだろうか

池田澄子
昭和11年生

で、困ったことに匂いが濃い。

寒満月そう言えば命は尊けれ

子供の頃から死を親しいこととして考えていた。「そう言えば」と気付いたのは、実は自分の死が遠いものではなく、なくなっているということだったのかもしれない。

●他の方達の「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以上）。

老い皺を撫づれば浪かわれは海 三橋敏雄

昭和五十年、三橋氏五十五歳の作である。この句を知った時点の私は、五十五歳の老い皺を疑わずに受けとめていた。いま思えば五十五歳は若い。

ともあれ「われは海」の認識の、老いを肯定した上での精神の豊かさと誇りにほれはれる。

大声をこのころ出さず五月晴 桑原三郎

似た句を書いたことがあって掲句を見て捨てた。時をかけての変化はふと気付いた段階で定着する。桑原氏も私も、自分のための他人への要求が薄らいで大声を出す必要がなくなったらしい。気力の減退かもしれないが、その衰弱は有り難い。これから何に気付くのだろうか。

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？
いま思えば一回目は九歳の時。父が戦争で逝き、その後敗戦を迎え、ときに死を願う母に抵抗する気持を持たない自分に気付いたとき。あれは一種の老いの自覚に近かったように思う。二回目は二十八歳の誕生日。三十歳を越えた女性には中性なのだろうと思っていたので。そして今回のアンケートの書状を読んだ時が三回目。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

初恋のあとの永生き春満月

老いを書こうとしたわけではないが、結果として自分の老いに関わった句になっている。初恋とは、初めて全身で自分の心を見つめることかもしれない。恋は人に言葉を書かせる。言葉を書きとめるようになって随分たつたことにふと気付いたのがきっかけの句。

お若いと言われこのごろ椎の花

「お若いですね」とは「若くないですね」ということ。花とも思えないような目立たない椎の花も、やっぱり花

流通経路異常なし

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？

奈良盆地に住んで、西の、東の山々を仰いで育ったせいだろうか、遠目がよく利いた。四十歳を過ぎて間もなくだったか、新聞が、辞書が読みづらくなった。眼科医に行く、と、老眼が進んでいますよ、とにべもなかった。

五十歳を過ぎてしばらくだったか、熊野への車中、遠くの景がすすんで見づらくなっているのに気付いた。左目を閉じると景は鮮やかだったが、右目を閉じると岬が、島が崩れているかのように薄白く濁った。白内障という診断を受けて、四年後に手術した。カルテを見ると、「壮年性白内障」となっていて、「壮年性」という記述に安堵した。〈昼寝よりはじむ入院一日目 和生〉と詠んで、久しぶりにゆったりとした日を得た。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〇三句程度挙げ、簡単に自解してください。

還暦の宴寒鯉の血を飲めと

還暦の宴と銘打ってはいなかったが、定年を前に私の講義を聞いたあと、一杯飲もうという教え子が、今日は

茨木和生
昭和14年生

先生、帰さへんでえ、と宴を持ってくれた。鯉の血やで、とけしかけた奴もいたが、洗いにした寒鯉の血であることは、口にふくめばすぐにわかった。

草いきれ尿が出がたくなりゐたり

「出」という文字の詠み込み句である。齢なりに想像を広げて作った句である。「本当ですか。病院行って下さい」と心配したまとも派もいたが、私の流通経路、今もいたって健全、全く異常なしである。

●他の方達の「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以上）。

弱り来し視力聴力花下に座す 右城暮石

暮石八十九歳の作品である。鳥柱をなして高く上昇していく刺羽が見えないとか、流れの音は聞こえるが、河鹿の声が聞こえないとか、暮石が言ったのはこの頃だったか。肉体の老いはいたしかたないが、精神が老いたら俳人じゃないから、と先生は元気だった。戯れて、先生は「人畜無害」やでねえと飲んでいて言ったら、無害かどうか、和生くん、奥さん貸しますか、とこられた。先生を恐ろしい老いと思った。

老いの諸相



岩井久美恵
昭和14年生

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？
五十五歳の頃、人の名前を忘れやすくなったときに「老い」を意識した。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〜二句程度挙げ、簡単に自解してください。

さんざしや青邨夫人ちんまりと

山口青邨先生のふるさと盛岡での作。青邨先生と並ばれたいそ子夫人の、お年を召して小さくなられたお姿を尊く思った句である。

秋寒やだんだんちさき父の顔

大腸癌をわずらった七十七歳の父の顔が、だんだん小さくなって行くのが悲しかった。相模湾を見下し、鳥の声に耳を傾ける父に、外は秋寒の澄んだ空気がみなぎっていた。

ふるさとに友の老いたる祭かな

ふるさと真鶴の貴船祭は、七月二十七日と二十八日に行われ、国の無形文化財に指定されている。

小学校時代の友人達が、祭の実行委員として活躍している。その姿には、白髪がまじり還暦を迎えた男の貫禄とやさしさと老いのきざしが認められる。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以上）。

ちぢばばに紫つつじ屏風なす 山口青邨

昭和六十三年、『日は永し』に載っている。

青邨先生のご自宅雑草園での作。五月になると雑草園のお庭に紫のつつじが屏風のように咲き、それはみごとであった。そのつつじが老夫婦のために咲いているという雑草園の日常生活を詠っておられる。

おはん舞ふ喜寿の姿も五月の雪 山口青邨

昭和五十四年、『日は永し』にある。

七十七歳の武原はんさんが五月に、地唄舞「雪」をみごとに舞われている姿を詠んでいる。凜として美しいはんさんの舞姿は、とても喜寿の人とは思えない艶やかである。

「はがねのこゑ」を

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳くらいで、どのようなきつかけがありましたか？

五十歳を越してからの数年、左足の骨折、腸閉塞といった身体面の不具合が続き、一生の不覚、つまり、再生の方向を辿らないリスクへの自覚を持つようになった。そうしたリスクへの自覚を老いと言うのであろうか。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一〜二句程度挙げ、簡単に自解してください。

胃カメラを抜かれてゐるや日の短か

ゆふがほの種蒔きしあと水を飲む

佐保姫の衣脱ぎたる利那かな

直截に老いを詠んではいけないが、老いの自覚を踏まえた作品といふべきかも。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（一句以上）。

雁も舟も海峡わたるとき迅し 石原八束

霜柱はがねのこゑをはなちけり

今生は病む生なりき烏頭 石田波郷

露か雨か十一月ははじまりぬ



七田谷まりうす
昭和15年生

鮫鱈もわが身の業も煮ゆるかな 久保田万太郎
湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

本誌（昭47・8）に掲載の石川桂郎・石原八束の対談「俳諧茶話」に於いて、八束は「骨董とか食べるものの味がわからなきや俳句がわからん、なにかそういう年齢があると僕は思うな。そして、そういう意味で俳句は僕は、やつぱり、老人の文学だと思っんです。老人の文学で少しも恥ずかしくない」、「若いときにもおもしろいかもしれんけれど、内にたくわえたあらゆるものを全部あそこに込める楽しさ、そういうもの」と述べている。

老いを詠むといっても、ストレートにその心象を観念的な言葉で表現するのではなく、季語のもつ具体的な写生構成力と伝達機能を発揮させないと、「若書きの老いの句」となってしまう。八束作品で言えば、掲出の「霜柱」の作品など歳月の重みが内面に貯えられ、一筋の「はがねのこゑ」との心情の吐露となつて結実している。「ボケウマ」（ボケてくるとウマくなる）の作品も悪くないが、やはり過去の経験を総動員しつつ一筋通った勁さあれかしと願うばかりだ。

此ノ命有テ此ノ命終ル



辻桃子
昭和20年生

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳ぐらいで、どのようなきっかけがありましたか？

くなるその時まで、ほんのしばらくの間を私は靸になっている。氷って凝ってきらきらして。

門柱の枯れきつたるが枯の中

この「門柱」も私だ。私のまわりの世界は、もう充分枯れてきた。枯れの中に枯れつつ私は呆然と立ちつくす。〈秋扇いよいよだめになつてきし〉とも、〈此ノ命^{ココノイノチハ}有テ此ノ命^{ココノイノチハ}終ル鹿鳴けり〉とも、〈流れゆく枯葉の上を蠅あゆむ〉とも詠んだ。いずれ死ぬのだ。「俳」とはそれ以外無い。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

師の波多野爽波にも、心にしみる老いの句がある。

霜枯れて行きとどこほる水があり
爽波

このあとはただ霜枯に委すのみ

脇息は倒れ初音はとうに去り

いづしかに秋の昼寝に入りし人

この「秋の昼寝」の人など、まったく爽波自身の死の自画像ではないか。こんな恐ろしい老いの句はない。

捕虫網新しきまま浮いてをり
爽波

爽波

老いてはをりませぬ

●「老い」を意識なさったことがありますか？ あるとすれば何歳へついで、どのようなきっかけがありましたか？

「老い」を意識したことはございません。

たしかに子供が生まれてじつと自分の手を見ることが増えましたが、自身の「老い」を思うというよりも男親としての自覚に疑問を持つということでありましょう。ましてや、祖母の高浜喜美子なども健在で饗饌として肉などを食べていることを思いますと、孫としてはとても「老い」を感じるなどという贅沢は許されないのであります。

もつとも体型は二十年前と比べますと、恐ろしくらい変貌しました。ウエストは六十八センチから八十三センチと十五センチほど増大しましたが、これも「老い」ということではないと思います。いわば「爛熟」とでも申せばよろしいでしょうか。青い林檎がふやけて腐りかけて焼き林檎待ち状態といったところでしょうか。

●「老い」を詠んだ御自分の句があれば一三句程度挙げ、簡単に自解してください。

自身の「老い」を詠んだ句はそういうわけでございます



坊城俊樹
昭和32年生

せん。ただ、昨年死去された伊藤柏翠氏を中国旅行の際に詠んだ、〈生身魂座席は二万フイート上空 俊樹〉^があります。幼少の時に初めてお逢ひした時からすでに翁だった氏の生身魂が最新式の旅客機で成層圏近くを自由に飛翔している様を描いたものです。「老い」というよりも「自在」という境地を描きたかったのですが、その仙人のような氏も不老長寿の薬を徐福に探させる前に虚子著『虹』の「愛子」のもとへ旅立たれました。

●他のかたの「老い」を詠んだ印象に残る句を作者名とともに挙げて、その印象を記してください（二句以上）。

「眼つむれば若き我あり春の宵　高浜虚子」はあまりにも有名な句です。作句は昭和四年四月四日とも。虚子五十五歳の男盛りでの心境とは思えない老成した感があります。その前年に「花鳥諷詠」を提唱して男として一つの事業の頂を築いた後の大きな安堵なのでしょうか。あるいはこれから合戦に赴く一将としての一瞬の懐古なのでしょうか。そして、万人の為に巨大な感情の量を押さえ込まざるを得ない俳壇を背負う巨人のプロローグでありましたか。